The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞マイケル・ポランニー（著）『暗黙知の次元』
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2019, 3(1), p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73157
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マイケル・ポランニー（著）『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫，2003 年 12 月刊，194 頁

矢守克也[1]
Katsuya YAMORI

１．災害研究と俗流「暗黙知」

冒頭から行儀の悪い表現で恐縮ではあるが、災害研究に登場する「暗黙知」は、経営学の分野で後になって作られた俗解（野中・竹内, 1996）を、さらに劣化させた形で使いまわされているのが現状である。ポランニーの正統的暗黙知と経営学における通俗的な用法とは、そもそも別物と考えるのが適当である（たとえば、大崎, 2009, 2017）。よって、経営学バージョンをさらに孫請けした災害研究の通俗版暗黙知について目くじら立てて批判してみても詮無きことかもしれない。しかし、見た目にはまったく同じ言葉が使われている以上、アカデミズムとしては健全な理解に向けた軌道修正の作業も必要だろう。また、無理解が少なからざる悪影響を防災・減災実践に与えていることも事実で、プラクティスの立場からも一定のおさえは必要だと感じる。

もちろん批判のための批判は生産的ではない。本稿では、すでに普及している俗解を自己反省のための鏡として前向きに利用しつつ、ポランニー自身が提起した「暗黙知」について、本書『暗黙知の次元』を繙きながら理解を深めていきたい。

まず、議論のための素材として、俗解の典型的なサンプルを示しておこう。

> しかし、災害対応も通常に生活していたら絶対に経験しないような異常な事態であり、災害の対応に当たった職員は、想像すらしていなかった多くの困難に直面します。その困難に対して知恵を出し合い、時には失敗をしながらも災害を乗り越えていきます。
>
> この経験やノウハウをその場限りで終わらせてしまうと、あまりにも勿体無いので、今後の災害にも活かすために災害エスノグラフィーは役に立ちます。
>
> 災害エスノグラフィーを通して、災害対応のプロセスのうち知識としてはなかなか共有化することが難しい「暗黙知」を体系的に整理し、暗黙知を形式知に変えることができます。
>
> 災害エスノグラフィーを作成するに当たってはインタビューアの質問に対して災害対応をしたインタビュー対象者が返答するような形で進みますが、基本的にインタビュー対象者が話し続けるように持っていく必要があります。
>
> インタビュー対象者から聞いた話はレコーダーで録音し、そのまま文字起こしをすることで、災害エスノグラフィーが出来上がります。
>
> 完成した災害エスノグラフィーをまだ災害対応をしたことがない人や防災について学んでいる段階の人が見ることで、災害対応のリアルなイメージをつけることができ、災害対応の知識について学ぶことができます。（Bousai Tech, 2018）

この後、4節で詳しく論じるように、暗黙知は、本来、「暗黙知と形式知」のように二項対立的に理解すべきものではない。たとえば、「xxを知っていることは形式知だが、yyができることは暗黙知である」のように、暗黙知と形式知を対照させる言いまわしは、暗黙知（と形式知）に関する適切な理解を示しているとは言えない。しかし、本節と2節では、まずは俗解に迎合し、暗黙知と形式知とを対照させる思考の枠内で議論を進めることにする。

さて、百歩譲って、暗黙知と形式知とを対照させる思考法を受け入れたとしても、通俗版暗黙知論は少なくとも2つ根本的な錯誤をおかしている。第1の錯誤は、上の引用では何の造作もないことのように描かれているが、暗黙知の形式知への転換は、不可能ではないにしても非常に困難で独特の摩擦を伴う点を看過していることである。2節で論じるように、実は、そうした困難や摩擦にこそ、暗黙知論に関するもっとも注目すべき意義があるのだが、俗解はこの点にまったく無頓着である。この論点に関するエビデンスとしては、ポランニー自身による以下の明快な宣言を引くだけで十分であろう。

> 暗黙的認識をことごとく排除して、すべての知識を形式化しようとしても、そんな試みは自滅するしかないことを、私は証明できると思う。というのも、ある包括的存在、たとえカエルを構成する

*1 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）
Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, Dr. Human Sciences.

> 諸関係を形式化するためには、まずそのカエルが、暗黙知によって非形式的に特定されていなければならないからだ。（p.44）［傍点はオリジナル］

ポランニーは「暗黙知を形式知化しましょう」と推奨するどころか、それは至難の業だと自ら明言しているのである。

このポイントについては、暗黙知の社会性について洞察に満ちた議論を展開した福島真人氏による次のシニカルで手厳しい批判を追加してもよいかもしれない。「言語化が困難とされる暗黙知を調査するのに、それを聞きとりだけで行うというのはほとんど語義矛盾である」（福島, 2001, p.49）。暗黙知の形式知化というとき、俗流解釈では、上の引用のようにそれを言語化する作業を念頭においている。つまり、聞きとり調査などを実施して当事者に暗黙知（らしきもの）を言語化してもらい、その言語記録（エスノグラフィー）やそれを二次的に加工したプロダクツ（マニュアル、ガイドライン、フローチャートなど）をもって、暗黙知が形式知化されたと見なすのがもっぱらである。しかし、言葉にするのが困難だとされる暗黙知の調査法として、それはほとんど自己撞着に等しいというのが福島の批判である。誠にもっともな批判である。

暗黙知の通俗理解に散見される第2の錯誤は、暗黙知と形式知とを対照させ、以下のような形で対照的に特徴づける過ちである。典型的には、暗黙知（経験知、実践知）は、より断片的、個別的、細分的な知であるのに対して、形式知（概念知、理論知）は、より体系的、包括的、全体的な知である――このような特徴づけである。この種の理解は、災害研究の文脈でも、次のような形でしばしば表明されている。災害現場には、さまざまな具体的な知恵やノウハウがあるが、残念ながら、それらは断片的、個別的、細分的な暗黙知のレベルにとどまっていることが多く、マニュアル等の形で、体系的、包括的、全体的な性質をもつ形式知化されねばならない…云々。

だが、この理解は誤っている。ポランニーが主張するところは、ほぼ完全に逆だからである。ここでも、直接的なエビデンスを示そう。本書の導入部でも登場し、解説書でもよく引き合いに出される顔の認知を例にとろう。だれかの顔を見て直ちに「彼だ」とわかる。けれど、どうしてそう簡単にわかるのか、その理由や過程について言語化するのは非常に困難だというとき、

> （顔という包括的存在を生み出す）［引用者挿入］形成（シェイピング）もしくは統合（インテグレイティング）こそ、私が偉大にして不可欠な暗黙の力とみなすものに他ならない。（p.21）

つまり、ポランニーによれば、暗黙知の方こそ、体系的、包括的、全体的な知のあり方なのだ（その意味は3節でさらに敷衍する）。それに対して、たとえば、「彼だとわかったのは、口がこんな形で、目にこんな特徴があり…」などと分析して形式知を生み出そうとしても、顔の特定という包括的な理解が暗黙知として成立しなければ、多くの場合、それらは相互に連絡を欠いた断片的、個別的、細分的なフラグメントと化してしまう。

２．「暗黙知」礼賛でよいか？

以上から、俗流暗黙知論、具体的には「（災害）現場の暗黙知は、それを形式知に転換して普遍化・体系化することが大切である」といった類いの議論の珍妙さは、十分理解いただけたと思う。ただし、暗黙知に関するより細かな考察に進む前に、もう一点確認しておきたいことがある。それは、形式知への変換の困難、および、そこから示唆される暗黙知固有の価値を根拠に、暗黙知礼賛、現場知称揚、実践知推奨という反対極へと一気に走ってしまう思考法がもつリスクである。この種の暗黙知礼賛論は、当然ながら、形式知礼賛と実は表裏一体で、両者とも「暗黙知対形式知」という素朴な二項対立図式を受け入れている点では同じ穴の狢である。平明に言えば、「現場に眠る暗黙知を言語化して共有しましょう」が軽率な態度だとすれば、「当事者にも言語化困難な暗黙知が現場にはあるから尊重しよう」も浅慮である。

では、どのように考えればよいのか。鍵は、前節で予示したように、――二項対立図式に準じた近似的な表現で次善とするなら――暗黙知と形式知とが接触する場面で生じる摩擦や葛藤にある。暗黙知を形式知化することも（経営学的語法では「表出化」と呼ばれる）、形式知を暗黙知化することも（同じく「内面化」と呼ばれる、ただし、ポランニーが用いる「内面化」はまったく異なる意味である。この点は5節で論じる）、極めて困難だという前提のもとで、それでも、両者の接合や転換を試みるほかない場面で生じる摩擦や葛藤こそが、双方に独特の効果

を功罪両面にわたってもたらすのである。再び、ポランニー自身の記述に戻ろう。

> 包括的存在を構成する個々の諸要素を事細かに吟味すれば、個々の諸要素の意味は拭い取られ、包括的存在についての概念は破壊されてしまう。そうした事例は多くの人が知るところだ。…（中略）…ピアニストは、自分の指に注意を集中させたりすると、演奏動作が一時的に麻痺することもある。倍率の高い虫眼鏡で部分を念入りに眺めたりすると、全体の模様や人相を見損ないかねない。（p.41）

このくだりは、諸要素の統合としての包括的存在たる暗黙知を、無理矢理、諸要素に細分化して、一流ピアニストの運指術や腕利きレントゲン技師の患部特定スキルなどとして形式知化しようとしても、それは困難であるばかりか、かえって名演や妙技が破壊されてしまうことを意味している。

しかし、逆に、形式知化の試み――正確には、その破綻や失敗――がポジティヴな効果をもたらすこともある。

> もっとも、こうした意味や全体像の破壊は、個々の要素をもう一度内面化［上で登場した経営学版における「内面化」とは異なるポランニー独自の重要ターム、5節で詳述；引用者注］し直すことで、修復が可能だろう。…（中略）…意味の修復は、初めの意味に改良を施すことがあるのだ。ややもすれば技能を麻痺させかねない動作研究も、練習によっては、技能を改善させることもあるだろう。テキストを切り刻む精読は鑑賞を台無しにしかねないが、テキストを以前よりはるかに深く理解するための材料を提供する可能性もある。こうした事例では、部分を念入りに吟味するのは、ただそれだけでは意味を破壊する行為なのだろうが、次の段階の統合へ向かうための道しるべとして寄与し…。［傍点は引用者］（p41-42）

暗黙知が形づくる意味（包括的存在）が、個々の要素へと形式知化されつつ還元・分解されるとき、あるいは、されようとしてそれが叶わないとき、還元・分解に伴う摩擦や葛藤を付随したプロセスを経ることで、――常にそれが実現するとは限らないが、ときとして――もともとの暗黙知（上例ではピアノ演奏やテキスト鑑賞）が「改良・改善」される場合があるわけだ。言うまでもなく、逆も真なりで、このとき、形式知（ピアニストの運指法やテキスト読解術）の方にも、暗黙知との摩擦と葛藤を経た「改良・改善」がもたらされる（場合がある）。なお、摩擦や葛藤こそが「改良・改善」の鍵だというのは、活動理論にも通底する思想で、その点興味を引くところである（エンゲストローム, 1999）。

以上のように、暗黙知と形式知は、ただ単に対立的な二項として存在しているのではない。むろん、「この暗黙知を形式知として体系化しましょう」とか、逆に「この形式知を暗黙知として自家薬籠中のものにしましょう」などと気軽に相互変換できる関係にあるわけでもない。両者は、摩擦と葛藤を伴う接面で相互に関係しており、摩擦と葛藤こそが双方のベターメントのためのエンジンなのである。

この意味で、たとえば、「指先に目があるように踊れ」など、言わゆる名人の「金言」や「わざ言語」は、たしかに、「現実の実践の複雑さを十分に反映していない、おおざっぱな言語表現」（福島, 2001, p.46）であり、「特定の文脈に高度に依存しているために、一般化できず、それゆえ部外者にとっては不可解である」（同 p.162）。しかし、それでもなお、それらは「言語」表現である。その意味で、金言やわざ言語――ある世代以上の読者には、元プロ野球選手長嶋茂雄流の言葉とでも言えばわかりやすいかもしれない――は、暗黙知と形式知間の単純な転換を意味しないのはもちろん、単にその困難・失敗を示すものでもなく、両者の摩擦と葛藤を通して双方が共にベターメントへと向かうための媒体（ツール）にもなりうることを示唆していると言えよう。

３．暗黙知の機能的関係――「暗黙知vs.形式知」を超えて――

暗黙知と形式知を二項対立させる図式から本格的に離陸するために、遅まきながら、ここで、暗黙知の正統的理解に不可欠ないくつかの基幹的な概念を導入する必要がある。以下、顔の認知の例を再びとりあげて説明しよう。

ある顔を見て直ちに特定の人だとわかるとき、目や口や鼻や耳の形状、顔全体の形やサイズ、髪型といった「個々の諸要素」（この用語はすでに2節で導入済）が暗黙知を形成する「第一条件」（「近位項」、「近接項」とも呼ばれる）となり、顔が「第二条件」（「遠位項」、「遠隔項」とも呼ばれる）となる。このとき、「第一条件」（「近位項」）と「第二

条件」（「遠位項」）は、非常に重要な機能的関係にある。

> 私たちが第一条件について知っているとは、ただ第二条件に注意を払った結果として、第一条件について感知した内容を信じているということにすぎないのだ。…（中略）…暗黙知が機能しているとき、私たちは何か別なものに向かって注意を払う（attend to）ために、あるものから注意を向ける（attend from）のだ。言い換えるなら、暗黙的関係の第一条件から第二条件に向かって注意を払っているということだ。（p.27）［傍点はオリジナル、一部引用者が改変］

まず、近位項と遠位項の両者は、それぞれ実体として自存しているのではなく、注意が「こちらからあちらへ向かう」という機能的関係で結ばれた2つの「項」にしか過ぎない。このことを理解することが死活的に重要である。実際、遠位項が遠位項として成立するのは近位項との関係に支えられてのことだから、遠位項をそれ単独で抽出しようとしても、それはできない。目鼻口耳といった個々の諸要素なしに顔だけを認識することはできないのだ。

しかし同時に、包括的存在である顔を抜きにして目鼻口耳の特徴だけを同定しようとしても、これまで論じてきたように、それら諸要素を明示的かつ形式的に表現することは大変困難である。それら近位項群が暗黙のうちに包括され遠位項という顔として成立している限りで、それらの諸要素は有意味だからである（蛇足だが、目鼻口耳自体に焦点化して、それらを遠位項として位置づけて言語表現することはもちろん可能である。困難は、遠位項として顔に注意が払われているときの目鼻口耳（近位項）の言語化である）。つまり、両者は、暗黙知を成立させるための独特の関係性あっての存在で、それ自体として自存することはない。言ってみれば、近位項と遠位項は、相方無くしてはやっていけない漫才コンビのようなものである。

次に重要なことは、近位項と遠位項の機能的関係は、決して固定化されたものではないという点である。そうではなく、この関係性は縦横無尽に転成し、融通無碍に変化する。したがって、そのありようはきわめて多様である。たとえば、私が、その顔を彼だと知ることができるとき、それを支える機能的関係は不変ではない。彼の顔や私の視力自体が変化するといった外枠的条件の変化による調整は言うに及ばず、より重要な要素として、関係性自体の「深化」を指摘できる。実際、彼とのつきあいが深くなれば、目口鼻耳といった定番の諸要素ではなく、それこそ私自身すら明示的に気づいていない、ちょっとした眉の動きが近位項として重要な役割を果たす形へと機能的関係が変移していくケースもあるだろう。同じことは、あなたの彼の顔認識についても該当し、あなたの場合、彼の顔全体の傾き具合が重要な近位項となって、つまり、私のそれとは異なるタイプの機能的関係が成立しているかもしれない。

このとき、彼の顔認識に関する私とあなたにおける機能的関係には、「そう、たしかに、彼の目はこうだね」のように容易に言語化でき（この時点で、彼の目はもはやそれ自体を単独で抽出できない近位項ではなく、それ自体に注意が向かっている（attend to）遠位項になっていると言うべきなのだが）、かつ二人の間で簡単に共有できるタイプのものも含まれているであろう。機能的関係に占めるこうした要素の割合が大きければ、その知は形式知の性質をより強く帯びていると言うことができる。

他方で、彼の顔認識に関する私の機能的関係とあなたの機能的関係が大きく異なれば、おそらく、そこから（無理矢理に）抽出される彼の顔に関する言語表現も大きく異なるだろう。このときは、前節で述べたように、そこで生じる摩擦と葛藤を契機として、私とあなたの双方を包含して、彼の顔認知に関して新しい機能的関係が成立するかもしれない。言いかえれば、私とあなたには共通する、しかし、第三者には「なぜ、あなた方にはすぐ彼だとわかるの？」と驚嘆をもって受けとめられるような新しい暗黙知が成立するかもしれない。

以上を踏まえれば、1節で強調したように、「暗黙知対形式知」と対照させる言いまわしが不適切であることがよくわかる。暗黙知と別に形式知があるわけではない。両者とも、近位項と遠位項とが織りなす機能的関係が変容するプロセスで生じる知のあり方の、それぞれ別の断面に過ぎない。別言すれば、現場の知とか、実践に伴う知とかいった特殊な知の形態だけが暗黙知なのでない。最後の6節で触れるように、たとえば、科学者たちが生み出す、見るからに組織的で体系的な科学の知においても近位項と遠位項との関係は当然機能しており、その限りにおいて、そこにも暗黙的な知のあり方は濃厚に介在している。

４．「暗黙知」の社会性――廣松認識論との接点――

上掲の福島（2001）は、暗黙知と社会的なコミュニケーションとの関わりの重要性について、繰り返し指摘している。「暗黙知という概念のポイントは、それによって認知研究が精緻化されるという点ではなく、むしろそれらの認知的な特性が、言語化、とくにコミュニケーションの問題とどのように関係してくるかといった問題設定をしたときに、その重要性は発揮されるのである」（福島, 2001, p.44）、「当然のことながら、暗黙知が『暗黙知』として問題構成されるということは、それがコミュニケーションの問題として社会的な意味を持つということを前提としている」（福島, 2001, p.66）。

筆者もこの主張に完全に同意する。その上で、一つ付加したい論点がある。暗黙知の社会性は、まず、ある個人において暗黙知が成立し、次にそれが他者に伝えられるようとするときに問題化されるという意味でそうなのではない。暗黙知そのものが――いや、本来、人間の知はすべからく、と言うべきなのだが――社会性を帯びてしか成立しないという事実から、暗黙知の社会性は生じている。暗黙知については、この、より強い意味での社会性、特に、その起源を見定めることが重要である。

この論点については、暗黙知を支える近位項と遠位項との機能的関係が、廣松渉の認識論の基盤にある「として」関係、すなわち、「所与を所識として」という関係を連想させることを踏まえるとわかりやすいだろう（廣松, 1982）。廣松認識論によれば、眼前のその物体は、それが意味ある対象として認識者の生活世界に現前する限り（私たちにとって認識の対象となって現れている限り）、単なるそれ（所与）以上の何か（所識）として、たとえば、書物として現れる。それは、意味不明の物質の集塊としてではなく、多くの用紙が整然と綴じられデザインされた表紙がついて…といった諸要素（近位項群）が統合された包括的存在である書籍（遠位項）として現れている。

「その話と暗黙知と何の関係があるのか」と反問されたい向きには、「では、眼前のそれ（所与）が、冊子でも手帳でも雑誌でもなく、他ならぬ書籍として認識されているのは、なぜか」と再反問することができる。多くの場合、他ならぬ書籍という所識（意味）を導出するときに機能している近位項群をすべて形式知化することは困難だという事実は、それを書籍だと見なすという単純な認識においても、近位項と遠位項との間の暗黙の機能的関係が関与していることを示している。廣松認識論における「として」構造と暗黙知を形づくる機能的関係とはけっして無縁ではない。

さて、よく知られている通り、廣松認識論は、上記の「所識としての所与」だけでなく、もう一つ「能識としての能知」と合わせて、都合4つの項が相互に関係する「四肢構造」として概念化されている（図1）。たとえば、眼前の物体が――暗黙のうちに――書籍として現れるのは、一定の諸要素（近位項）群を書籍（という意味のもの）として認識することを慣習化させてきた人びと（能識）の一員としての個別の身体に対してのみである。このことは、たとえば、オオカミに育てられた少女に対しては、眼前の紙の束は、未来永劫、書籍としては現れない事実に端的に表れている。あるいは、映画『ミラクル・ワールド ブッシュマン』（『コイサンマン』に改題）の中で、アフリカ・ボツワナの上空を飛ぶ飛行機から投げ捨てられたガラス製の物体（所与）が、それを拾った現地の人びとにとっては、単なるコーラの瓶ではなく、それをいかなる所識（意味のもの）として受けとめるかに関して無限の可能性を与える存在であったことを考えてもわかる。

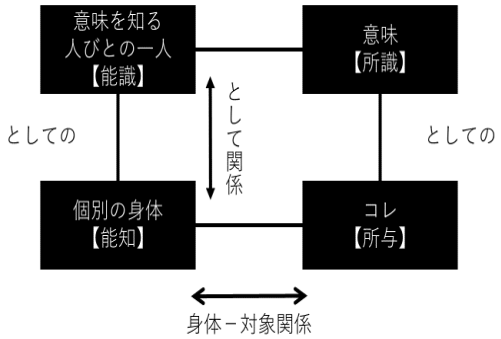

図1. 廣松渉による四肢構造

乱暴ではないかとの批判も覚悟の上で、ここで、あえて廣松認識論を持ちだして強調したかったことはただ一つである。それは、暗黙知の基底にある近位項と遠位項との間の「として」の機能的関係は、知られる対象の側の関係性（四肢構造論では、所与－所識関係）単独で成立しているのではなく、それを知る主体の側に存在する同種の機能的関係（同じく、能知－能識関係）とペアで成立しているという極めて重要な事実である。これは、暗黙知を「知識」に関する理論（「主体」に関する理論ではなく）

と見なしてきた俗流暗黙知論ではほとんど無視されてきた側面である。しかし、これが非常に重要な論点であることは、ポランニー自身の次の言明を参照するだけで明らかである。この言明は、本書評で紹介している『暗黙知の次元』に直接あたった読者にもなじみが薄いかもしれない。というのも、これは、

> 私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる（p.18；傍点オリジナル）

という超メジャーなフレーズが紹介される第Ⅰ章ではなく、特に俗流暗黙知論ではまったく注意が払われていないように見える第Ⅱ章以降に登場するからである。

> 第Ⅱ章は、暗黙知の構造が包括的存在の構造を決定する仕組みについて明らかにした。暗黙知が人間の動作を包括する仕組みを研究することによって、私たちは、包括（＝理解）されるものが、それを包括（＝理解）する行為と同じような構造を持っていることに気づいた。（p.94）

暗黙知は、福島（2001）が指摘するように、たしかに、そのコミュニケーションが問題化されるときに重要性を増す。その上で、なぜそうなるのかが肝心である。それは、これまで説明してきたように、暗黙知という概念に、対象（知識）側の機能的関係だけでなく、主体側の機能的関係（能知－能識関係）が前提されているからである。対象（知識）側で、一定の近位項群が特定の遠位項へと包括（＝理解）されるという関係性が暗黙のうちに形成されるのと同時相即的に、主体側では、そのように包括することを慣習化させた能識としての能知という機能的関係が形成されているのだ。別言すれば、暗黙知がコミュニケーション場面で問題として顕在化するのは、暗黙知がもともと四肢構造という社会性に支えられており、暗黙知のコミュニケーションとは、四肢構造――あえて主体側だけを特出しすれば、能知－能識関係――に対するゆらぎ・攪乱であり（暗黙知をだれかに伝えるとは、当該の暗黙知を成立させてきた四肢構造に関与していなかった身体をそこに関与させることなのだから）、それを契機とする四肢構造の再編だからである。

５．「内面化」と「内在化」――身体を超える暗黙知

暗黙知に関しては、もう一つ別系統の鍵概念について検討しておかねばならない。それが、「内面化（取り込み）」（internalization）と「内在化（棲み込み）」（indwelling）である。この両者は、まったく同じ一つの事実を正反対の方向から表現している。このことを理解するのが肝心である。同じ事実とは、暗黙知を形づくる近位項と遠位項の機能的関係が成立しているとき、身体がその皮膚界面を超えて自由自在に膨張ないし収縮しているという事実である。

具体的な事例を通して、この点について説明しよう。たとえば、熟練の放射線技師にとってのレントゲン写真上の独特の模様、プロドライバーにとってのハンドル越しの諸感覚、（オオカミに育てられた少女ならざる）私たちにとっての眼前の物質の集塊は、それぞれの対象を、病巣、タイヤの表面温度の上昇、書籍（という遠位項）などとして認識させる近位項として機能している。こうして、

> ある事物［写真上の模様、ハンドル感覚、眼前の集塊；引用者挿入］に近位項の役割を与えるとき、私たちはそれを自らの身体に取り込む［内面化：引用者挿入］、もしくは自らの身体を延長してそれを含みこんでしまう。その結果として、私たちはその事物に内在する（indwelling）ようになる。（p.38）

つまり、それらが、病巣であるのも、タイヤの表面温度の上昇であるのも、書籍であるのも、すべて、四肢構造の関係性の産物なのだが、その関係性を、環境から身体へというベクトルで表現すれば、レントゲン技師、ドライバー、私たちという身体が、投影写真読解のための「秘術」、ハンドルに関する鋭敏な「感覚」、「私たちはそういうもののことはふつう本と呼んでいる」という「常識」を、それぞれ「内面化」しているという表現になる。他方で、まったく同じ関係性を、身体から環境へという反対方向のベクトルで表現すれば、――白杖の取り扱いに精通した視覚障害者にとっては、自分の手が杖へと拡張されて、杖の中へと身体が膨張し、身体が杖に「内在化」していると言えるのと同じ意味で――レントゲン技師、ドライバー、私たちは、それぞれ、レントゲン写真、ハンドル、書籍の中に「内在化」していると言える。

ここでの議論は、見方を変えれば、暗黙知（一般には、知）が「どこにあるのか」と問うているのに等しい。「内面化」および「内在化」という鍵概念

を理解した私たちとしては、俗流暗黙知論が前提にしている常識的知識観、つまり、知識というものは特定の身体（個人）に内属するものだという通念は明確に斥けなければならない。そうではなく、――あえて、身体対環境という実体主義的世界観に妥協するとしても――暗黙知は、他の身体を含む環境と当該の身体との界面を超えて、両サイドに浸潤する形で存在していると見なさねばならない。たとえば、プロドライバーの例でいえば、ハンドルに伝わってくる微妙な感覚からタイヤの表面温度の上昇を感知し、ブレーキング方法を調整しつつ、次のピットインのタイミングをはかる…こういったテクニックは、けっしてドライバーの身体に内臓された知識やスキルというわけではない。ドライバーの身体（具体的な手足の動作や五感の働き）だけでなく、いつものタイヤと走り慣れた路面（から伝わる違和感）、文字通り身体の一部と言えるまでになったハンドルや車体、さらには、先輩ドライバーがかつて漏らした「金言」、その日の天候、ピットスタッフの技能などが渾然一体となったところに、彼の運転を支える暗黙知をめぐる機能的関係、は成立している。

こうした理解は、再び、Engeström（1987 山住他訳 1999）の活動理論（活動の三角形）にも通底する。活動理論の鍵は、一にかかって、個体主義的思考からの脱却である。たとえば、今日の大衆的防災・減災論は、避難訓練への参加率が低迷しているという課題に直面したとき、ほとんど自動反応のように「防災意識を高める必要がある、訓練に参加しない人たちの防災意識が低いことが原因だ」などと応じる。しかし、これこそ、何かというと「意識」、「バイアス」、「モチベーション」といった概念に頼りたがる典型的な個体主義的思考である。避難訓練への参加率低迷を含め、あらゆる社会的な課題は、エンゲストロームが示唆するように、常に、その課題が生じている物理的環境や、その課題をめぐる規範、ルール、ツールなど、個人を取り巻く社会的環境の総体を視野に入れて考察され、また問題解決がはかられるべきである（紙幅の関係で活動理論について詳述する余裕はないので、エンゲストロームの上掲書または杉万（2013）を参照されたい）。これと同じ発想の転換、つまり、個体主義的発想から個体・環境を包括した思考への転換が、暗黙知論の基底にも存在する。

６．それは私たち研究者にも適用される

ポランニーの原書の最終章（第Ⅲ章）は「探求者たちの社会」と題されている。後に述べる通り、この言葉には明確な定義が与えられているが、さしあたって、探求者たちというのは、今ここで、暗黙知について検討している私たち自身を含め研究者のことだと理解しておけばよい。つまり、暗黙知に関するポランニーの議論の最終ステージは科学研究（者）論であり、さらに踏み込めば、社会の中で多くの関係者と共に知を生み出し、社会のベターメントをはかる研究実践として定義できるアクションリサーチ論と見なすこともできる。これは、暗黙知を支える機能的関係は知られる対象の側の関係性だけではなく、それを知る主体の側の関係性とペアで成立しているとの理解（4節）の自然な延長でもある。そうだとすれば、今ここで暗黙知について論じている私たちだけは、この関係性から免れた特権的で無風のポジションに身を安んじられると想定することはできなくなる。

第3章の、いささか執拗とも映るポランニーの議論は、ソビエト社会主義のもとで科学的実証主義と道徳的完全主義との結託がもたらした大きな不幸に対するポランニーの憤怒と警戒（彼はハンガリー生まれである）を背景としているが、それはともかくとして、ここでは、科学研究論としての暗黙知について、次の点をおさえておくことが重要だろう。

> …掲載を拒否された論文は科学的に黙殺されるのだ。そうした判断の基になるのは、事物の本性に関する科学的信念、また科学的価値を生み出しそうな方法に関する科学的信念である。こうした信念とそれに基づく科学的な探求方法を体系化するのは、難しい。それらは、主として、科学的探求に従事する伝統的方法の中に暗黙裏に含意されているものだからである。（p.108）

ここでポランニーが注意喚起を求めていることは、ときに形式知を生み出すための特権的な活動と目される科学的営為（研究活動）自体が、多くの言語化されざる暗黙知（正確には、暗黙知をめぐる機能的関係）によって支配されているということである。

この逃れがたい制約から私たち研究者が完全に解放されることは、原理的にありえない。しかし、自らもまた、この制約のただ中にあることを最大限自覚した上で、その制約の範囲内でベターメントを図るための方向性もまた、ポランニーによって示唆されている。具体的には、以下のような指摘である。

> 隠された真実の接近を予期する人間の能力を認識すること（p126）

> 認識者が自分の予感を形づくるときですら、非個人的な要求によっていかに制御されているか…（p127）

> 活動中の科学者の推測は発見を求める想像力に由来する（p130）

> 思考は固有のパワーを持ち、隠れた真実の暗示によって人間の精神に呼び起こされる（p136）

> 他の人々には見えない問題を見て、自分自身の責任においてそれを探求するという能力を持つ（p136）

ここには、人間とその思考に対する絶大な信頼が表明されている。ただし、その信頼は独特の形態をとる。人間にとって思考は、暗黙知という本書の主題に典型的に現れているように、思考する個人に対して完全には現れることなく、むしろ背後に隠され完全に制御できず、とらえどころのない暗示という形でしか予感されない。すべての知を形式化することなどできないのだ。しかし、その茫漠とした暗示に対して、それでもなおそこにコミットし、責任をもってそれを探求しようとする姿勢――これこそが、ポランニーにとっての思考である。こうした姿勢をもつ研究者たちが形づくる社会を念頭に、ポランニーはこう結論づける。

> 私はこのような社会を「探求者の社会」と呼ぶ。（p136）

『暗黙知の次元』を読み解く作業を通して、私たちは、俗流暗黙知論からは一歩も二歩も前進した地点にやって来ることができた。翻って考えてみると、

> 私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる。（p.18；傍点オリジナル）

この著名なフレーズの歯切れの良さや使い回しのよさが、これまで、かえって暗黙知論には災いしてきたのではないか。このあまりにも耳ざわりのよいフレーズが、個体主義や実体主義といった常識的な世界観、あるいは、理論対実践、言語対非言語といったわかりやすい二項対立図式と結託することによって、形式知への転換を安易に推奨する素朴な実証科学主義、および、平板な暗黙知称揚や実践知礼賛を生む土壌となってきたのだ。

ポランニーが「探求」しようとしたことをすべて追尾できたなどと傲岸不遜なことを言うつもりはない。それどころか、仮にすべて追尾できたと感じたとすれば、それこそ形式知への過信であり、ポランニーから探求者の道を踏み外す行為だと指弾されるだろう。せめて、本小論が、暗黙知に関する「探求」を今よりは幾分ましな方向に転轍させるための踏み台になればと願うのみである。

参考文献

Bousai Tech（2018）災害エスノグラフィーとは？ 災害現場のリアルな声から学ぶ［https://bousai-tech.com/plan/ethnography/］（最終アクセス日2019年8月18日）

Engeström, Y. (1987). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit.
（エンゲストローム, Y 山住勝広他（訳）（1999）拡張による学習――活動理論からのアプローチ　新曜社）

福島真人（2001）暗黙知の解剖――認知と社会のインターフェイス　金子書房

廣松渉（1982）存在と意味――事的世界観の定礎　岩波書店

野中郁次郎・竹内弘高　（1996）知識創造企業（梅本勝博訳）　東京経済新報社

大崎正瑠（2009）暗黙知を理解する　東京経済大学人文自然科学論集, 127, 21-39.

大崎正瑠（2017）暗黙知を再吟味する　東京経済大学人文自然科学論集, 140, 79-100.

杉万俊夫（2013）グループ・ダイナミックス入門――組織と地域を変える実践学　世界思想社